

お届けしたい「声」がある



▲
自宅で録音作業に励む重塚さん

よ く響く低音の声の持ち主、テレビやラジオ番組でプロのナレーターとして活躍する重塚利弘(53歳・伊川分教会長坂布教所教人・神戸市)。音訳を始めたのは3年前。時報で「音訳ひのきしん者養成講習会」の広告を見た瞬間、「これだ!」と直感した。

信仰家庭の長男として生まれ育った。30歳のときに入った修養科で、講師から「良い声ですね。アナウンサーをされているのですか?」と尋ねられた。このひと言が、ナレーターの道へ進むきっかけとなる。

念願叶い、プロとして生計を立てるなか、12年前にはボイスタレント事務所の合資会社を設立。「ナレーター業で得た喜びやこれまでのご恩を、お道の御用を通して人さまにお返ししたい」と考え始めた矢先、音訳と出合った。

現在は、自宅にある機材を用いて録音作業にいそしむ。車のエンジン音や人の話し声が入らないよう、作業を始めるのはいつも深夜だ。

まず原稿に目を通し、入念に下調べをしてから録音する。このとき「自分の職業上の癖に、たびたび悩まされる」。

ナレーターは、内容に感情移入して抑揚を付けながら原稿を読む。

一方、音訳では感情を入れ過ぎると、聞き手に文章の正確な意味が伝わりにくくなる。

「くっきり、すっきり、はっきり」とした読み方が求められる音訳では、“過度の装飾”はかえってマイナス要素になる。

ナレーター歴23年。感情移入してしまう癖を消し、“中立の視点”で原稿を読み上げるのは容易ではなかった。始めた当初は読み直しが当たり前。録音が終了するころには、すでに日が昇っていた。

ひたぶる努力の先には、新たな“気づき”があった。

「音訳を始めてから、日ごろ接する人たちに対して、思いやりを持つというか、相手の気持ちを慮ることを心がけるようになった。録音の際、目に見えない聞き手のことを考えているからかな」

先日、一通の手紙が届いた。

——重塚さんの音訳を聞いて感動しました——

手紙を読んだとき「自分は、このために頑張ってきたのだ」と思った。「修養科中の“ひと言の声かけ”によって、人生が大きく変わった。これから私も、人さまの心に響く“ひと言の声かけ”ができるようほくになれたら」

(文中、敬称略)